

Alternative Systems Study Bulletin

第9巻第2号

(2001年6月30日)

哲学の旅 第7回

アドルノ『否定弁証法』に学ぶ

- 第1章 否定弁証法の前提
- 第2章 否定弁証法の概要
- 第3章 ヘーゲルのカテゴリーの批判
- 第4章 否定弁証法を超えて
- 第5章 補論

哲学の旅 第5回 (続)

カント研究序説

- 第6章 物自体論の批判

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール kyw04500@nifty.ne.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

哲学の旅 第7回

アドルノ『否定弁証法』に学ぶ

はじめに

5月12日の第3次 第2回PC講座で「存在と意識」というテーマで、ヘーゲル弁証法の検討をしてみました。そして、ヘーゲル弁証法の転倒について一応の準備作業が終わり、いよいよヘーゲルに手をつけることにしていました。ところが、アドルノの『否定弁証法』に目を通してみると、これが実はヘーゲル弁証法転倒の試みだったのですね。

もともとアドルノは、ブロッホやホルクハイマーとともに60年代に日本でも紹介され、アドルノの『啓蒙の弁証法』や『否定弁証法』の存在はよく知られていました。でも邦訳が出るのはずっと遅れ、『啓蒙の弁証法』が単行本で出版されたのが、1990年、『否定弁証法』の方はもっと遅れて、1996年のことでした。

私事になりますが、『啓蒙の弁証法』の訳が『現代思想』で連載されはじめたとき、一応読んでみ

ましたが、あまりピンとこなかった、という思いがあり、そして『否定弁証法』が出たときも本屋でページをめくってはみましたが、読む気にはなれませんでした。でも、現時点で読んでみますと、アドルノは、カントとヘーゲルとマルクスをふまえてハイデガー批判を試みていることがわかりました。ハイデガー批判では、レヴィナスの試みと通じているところがあるのですね。

それよりもうれしかったのは、アドルノがカントの超越論的仮象論をふまえて、ヘーゲル弁証法のカテゴリーに批判を加えていることでした。マルクスの弁証法を理解すれば、カントに帰ってヘーゲル弁証法の転倒を試みる、ということは自然の流れとなるのかも知れません。ということで、とりあえず『否定弁証法』の中心をなしている第2部否定弁証法——概念とカテゴリーを取り上げることになります。

第1章 否定弁証法の前提

1) ハイデガー批判のポイント

アドルノの否定弁証法のカテゴリーを検討する前に、アドルノによるハイデガー存在論の批判のポイントを抜き出しておきましょう。というのも、アドルノはカント、ヘーゲル、マルクス、そしてハイデガーに目くばりしながら論を進めているからです。

アドルノによっては、ハイデガーは反面教師です。というのもハイデガーは、まさに弁証法が問われている局面でそれを拒否し、主観を超越させてしまうからです。

「ハイデガーは、理性の思考内容への不適合性があらわになるような、主観と客観との差異を超

えた一つの立場を採ることによって、それを処理することが弁証法の動機の一つとなるといった、そうした問題は、回避する。けれども、こうした飛躍は理性の手段をもってしてはうまくいくものではない。思考は、すべての思想や思考そのものうちにさえ在る主観と客観との分離が、すぐさま消えてしまうであろうような立場を勝ち取ることはできない。だからこそ、ハイデガーのもとにある真理の契機が、世界観的な非合理主義のレベルに低下させられてしまうのだ。哲学はカントの時代と同様に今日も、理性による理性の批判を必要としているのであって、理性の解体や廃棄をもとめているわけではない。」(アドルノ『否定弁証法』作品社、106頁)

「存在者なしに存在は考えられないし、相互の媒介なしにいかなる存在者も考えられないという、存在と存在者との弁証法は、ハイデガーによって抑圧される。」(143頁)

ここではアドルノによる執拗なハイデガー批判を紹介することはひかえておきます。明白なことは、アドルノにとっての弁証法とは、ハイデガーの存在論の内在的な批判としての意義をもっていることです。引用したところでアドルノは二つの弁証法を提案しています。ひとつは、主観と客観との間の差異、つまりは理性の思考内容における不適合性としてあらわれるこの差異を思考することであり、もう一つは、存在と存在者との関係性を思考することです。

以上を前おきにして、第2部の検討に入ります。第2部は、32の項目から成りますが、まず最初の3項目で否定弁証法の前提について述べられ、ついで、次の3項目で否定弁証法の概要が描かれています。そして以降は主としてヘーゲル弁証法のカテゴリーの批判となっています。

2) 思考と存在との非同一性

最初の3項目の小見出しは次のようになっています。

- 1、〈あるもの〉(エトヴァス)の消去不可能性
- 2、事物的な内容へと向かうよう強要するもの
- 3、「のぞき眼鏡の形而上学」

まず冒頭の文を引用しておきましょう。少し長いですが、ここに否定弁証法の前提が述べられています。

『存在するもの』がなければ『存在』もない。存在という概念も含めて、およそ概念を考えるためには、その基体としての〈あるもの〉が不可欠である。それはたしかに思考とは同一化できない事物的なものを極度に抽象したものであるが、いくら思考を進めたからといって消去することができるというものではない。つまり〈あるもの〉なしには形式論理学さえも考えることはできないのである。論理学はけっしてそのメタ論理的な痕跡を掃いてしまうことはできない。『なにに一般』という形式によって、思考はこの事物的なものを振り捨てることができるという考え、つまり[内容から独立な]絶対的形式があるという仮定

は幻想である。『事物的なもの一般』という形式を成り立たせているものは、事物的なもの内外的経験なのである。これと対応して、対極である主観の例でも、思考の機能である純粋な概念を、存在者としての『私』から完全に切り離してしまうことはできない。フィヒテ以来の観念論の『根本的誤謬』は、われわれは抽象する運動において抽象される当のものから自由だ、とするところにあった。今日ではこういう誤謬は思想から締め出され、それ本来の領土からは追放されている。しかし、それ自体が否定されたわけではない。それへの信仰は、まだ魔力をもっている。」(164頁)

アドルノがこのように述べる時、当然ヘーゲルの『大論理学』が念頭におかれています。注で、アドルノは、ヘーゲルが論理学を「有」ではなく〈あるもの〉から始めることができない、と述べていることに言及しています。〈あるもの〉という観念は「有」という観念に比べて非同一的なものに一層寛大であるかもしれないのですが、ヘーゲルにあつては、論理学のはじめに〈あるもの〉という言葉をおくことで、その言葉が思い出させる非同一性の痕跡がほんの少しでもあることを我慢できなかった、というのです。

ところで、私は、この冒頭の文で、アドルノが「思考とは同一化できない事物的なもの」と述べていることに注目します。つまり、アドルノは、〈あるもの〉を措定することで、思考と存在が同一ではないこと、その非同一性を展開していく弁証法を構想しようとしているのですね。

でもアドルノの場合、この非同一性の確認は、思考の論理と存在の様式のちがひ、というところにまで進んでいません。アドルノにとっての思考と事物的なものとの非同一性とは、いくら思考を進めていっても消去できない〈あるもの〉ですから、このような非同一性を追求するのは、やはり哲学の課題となるのですね。

これに対して存在の様式と思考の論理のちがひ、という見地からは、存在の様式を捉える文化知の方法が導かれ、これはさしあたっては、人間の社会関係の存在様式の解明という内実でもって、旧来の個別科学や哲学を超えた方法が要求されてきます。とまれ、アドルノがこの非同一性を否定弁証法の前提として措定したことで、一体どのよう

な弁証法が展開されていくのでしょうか。

思考と事物的なものとの非同一性は、<あるもの>を思考が消去できないことで思想に絶対的形式がある、という仮定を幻想に帰すとともに、他方で、主観の側でも思考の機能である純粋な概念を、存在者としての「私」から切り離せないということになる、とアドルノは述べています。この見地から、ドイツ観念論の根本誤謬が抽象していく思惟の運動が、抽象される当のものから自由であると仮定していたことにあったことが明らかにされます。

「根源哲学『第一哲学』というものは、必ず概念の優位という考えを伴っている。なぜなら、それを否定する者は根源から哲学すると自称する体裁をも失ってしまうからである。それでも哲学が『超越論的統覚』とか、あるいは『存在』とかに思いを馳せることによって自分をなだめることができたのは、これらの概念が、哲学にとって自分が考えている思考と同一だと思えたからである。ところが、こうした同一性などは原理的にお払い箱だと告げられることになると、究極的なものと思われた概念の自足もこの同一性の失脚に引きずり込まれてしまう。こうして、すべての普遍概念の基礎的性格は、特定の存在者の前で崩壊するから、哲学はもう全体性を望むことは許されない事になる。」(165-6頁)

アドルノによれば、根源哲学とは、必ず概念の優位という考えを伴っており、さらにまた、存在についての概念が思考と同一だと思っているわけですから、思考によって消去できない<あるもの>の存在を根拠に思考を存在との非同一性という立場に立てば、根源哲学はもう全体性を望むことができなくなる、というのです。こうしてアドルノは、非同一性を出発点にして、根源哲学の批判へと向かっていきます。でも、次は飛ばして第2章に進んで下さい。

3) 既成の根源哲学への批判

アドルノは第2、第3項目でカントとヘーゲルの哲学を取り上げ、その内在的批判から、非同一性という否定弁証法の出発点を導き出そうとしています。まずアドルノはカントの感覚を「この<あるもの>として、けっして消去できない事物的

な地位を占めている」(166~7頁)とみなしています。

ところがカントは、「私」の経験を究極的なものにしてしまっています。これは私が「カント研究序説(続)」(本誌所収)で書いたカントの物自体論の批判と同じ視点にアドルノが立っていることを示しています。

「まるで、ある個人の意識にとって究極的と思われるものがそれ自体としても究極的であり、他の人々の局限された個人的意識が、自分の感覚にも同じ優位性があると言って意義を申し立てることはまかりならぬと言わなければならない。」(167頁)

私はカントの物自体論の批判を、人間と人間との関係にあつては、カントは人間を思考という共通物で一括してしまっていて、他者の絶対的他性を見失い、その結果、自ら打ち立てた超越論的仮象批判の見地を捨ててしまっているというように展開したのですが、アドルノも、カントが意識の同型を前提にしていることを批判したのです。

でもアドルノはそれに止らず、カントの感覚を<あるもの>と捉え返すことで、カントの主観的構成についての内在的批判を展開していきます。カントは超越論的主観が機能しうするためには必ず感覚が必要だとしています。そうであるなら、主体は単に純粋統覚だけでなく、自分の対極である質料にも固縛されることにはならないか、とアドルノは述べています。そうすると、カントが『純粹理性批判』で展開した主観的構成の教説全体が必然的に崩壊してしまう、というわけです。

次にアドルノは同一性という観念の検討に目をうつします。主観的構成の教説の崩壊は同時に自己同一性という観念の崩壊をも意味している、というのです。アドルノによれば、同一性とは、自分の内容である質料よりも恒久的であろうとした概念の支配に端を発しているのですが、この支配がゆるぐわけですね。

「概念にとって不可欠なこの非概念的要素は、概念の即自存在を頑として認めず、概念を変革する。非概念的なものの概念は、その本来の在りかである認識理論のもとに何時までもとどまっていることはできない。すなわち認識理論に強要されて、哲学はいやでも事物的内容性をもつようになってしまう。」(167頁)

これは後に詳しく展開される否定弁証法概念論ですが、アドルノはカントの認識理論について、感覚を<あるもの>の地位に定位させるだけで、概念の支配というその内容を転倒させ、非概念的要素による概念の変革という新しい認識理論が導き出される、と見ているのです。

「だが主観と客観とは、本当はカントの構図に見られるように頑なに対立するものではなく、相互に浸透し合っている。カントが事物をカオス的な抽象物に格下げすれば、その格下げは、このカオスに形式を与えて、それを形成するとされる〔主観の〕力をも触発して、それを格下げしてしまう。」(169頁)

アドルノによれば、根源哲学が同一性、つまりは絶対的に第一のものについて説こうとすれば、どうしてもそれに見合った相関者として、この同一性とは異なる絶対的に異質なもののことについて語らざるを得ず、こうして第一哲学と二元論とは同じ穴のむじななんですね。カントが「統覚の総合的統一」を第一原理とし、そして対象がもつ規定を主観性によって投入されたものとし、そして、物自体としての対象は認識できないと主張したとき、カントは、この対象がもつ規定を主観が投入するとき、それは純粋に主観的なものではなく、対象からも働きかけられている、という点を考慮しなかったのです。だから、主観と客観とを対立させたカントは、肝心の主観の力をも格下げにしたとアドルノは述べています。ではヘーゲルはどうだったのでしょうか。

「主観が対象に就縛を加えると、その呪いは主観の上にも降りかかって主観の就縛となる。ヘーゲルはこの呪縛を二つながら消し去ろうと獅子奮迅の働きをした。〔彼によれば〕主観とはそのカテゴリー的働きの内で力を使い果たして、すっかり落ちぶれてしまう。主観が自分に対立するものをカント的意味における対象になるように規定し、分節できるためには、主観は、これらの諸規定の客観的妥当性に合わせて単なる普遍性に薄められ、認識の対象からと同様に自分自身からも切斷されなければならない。そうやってはじめて対象は、綱領の通りその概念へともたらされ、概念を適用できるようになる。客観化する主観はどんどん収縮して抽象的理性という『点』になる。そして遂

には、特定の対象から離れてそれだけでは何の意味ももたない論理的矛盾性になってしまう。当然の結果として、〔統覚の総合的統一という〕『絶対的に第一のもの』もその相関者も、あくまでも無規定的なものにとどまる。具体的にそれに先行しているものは何かと反問しても、抽象的に対立しあった両契機の統一はけっして現われてこない。というよりもむしろ、硬直した二分法的構造が、両極のおのおのがそれ自身の反対物の契機であるという規定によって壊変する。二元論は哲学的思索につきものであり、思考が進むにつれてその虚偽があらわになるという仕方では不可避のものである。『媒介』という言葉は、たとえ不完全であるにせよ、この事態を最も一般的に言い表した言葉なのである。」(169~170頁)

アドルノは、ヘーゲルの弁証法を、カントの主・客二元論の両極のおのおのがそれ自身の反対物の契機であることを見出すことで、それを壊変させた、と見えています。ところがこの壊変によって、主観の支配が覆されると、事物の優位性が呼び出されてくるはずですが、ヘーゲルの場合そうはなっていないのです。このヘーゲル弁証法の批判は、このあとずっとアドルノのテーマとなっていきます。

「カント哲学は絶対者の直接知という幻想を打ち壊した。この点では、それは真である。だがカント哲学は、たとえばそれが『原型的知性』であったとしても、この絶対者を直接的意識に相応するモデルによって記述した。これは真ではない。この非真理性を立証したことが、カント以後の観念論の真理性である。けれどもこの観念論もまた主観性に媒介された真理を主観とのものと同一視し、あたかも主観の純粋概念が存在そのものであるかのように振る舞った。この点でそれは、まともや偽りだったのである。」(171頁)

アドルノは第3項「のぞき眼鏡の形而上学」の末尾をこのように締めくくっています。のぞき眼鏡の比喩についてはここでは紹介しませんが、ハイデガーの言う世界・内・存在というものも、主観が閉じこもった塔の壁のことで、この壁は、外の影だけをうつし、この影は主観によって構成されているものなんですね。

アドルノによる根源哲学批判の試みとしてのこ

の二つの項目は、実は要約することが非常に困難なものでした。でも次からは、目のさめるような

展開が見られます。

第2章 否定弁証法の概要

1) 思考に反する思考

アドルノは否定弁証法の概要について、次のように述べることから始めています。

「ある点で弁証法的論理学は、これを排撃する実証主義よりももっと実証的である。弁証法的論理学は思考でありながら、思考さるべき対象が思考規則に従わない場合においてさえ、対象の方を尊重するからである。対象の分析は思考規則に影響を及ぼす。思考は、けっしておのれ自身の法則性に自足してはならない。思考は自己自身を放棄することなしに、自己自身に反して思考することができる。もし弁証法というものが定義できるとしたら、これはそういう定義の一つとして提案しなければなるまい。」(171頁)

これはまさに金言ではないでしょうか。よくぞ言ってくれましたね、アドルノさん。アドルノほどの人物がこのように言っているのに、この提案に共鳴して仕事をした人は居るのでしょうか。

弁証法的論理学は、実証主義よりももっと実証的だ、ということはいく言われていることですね。弁証法は具体的なものをそれに則して把握しようとするわけですから、その限りで、単なる実証主義よりも実証的でなければまやかしくなってしまいます。でもアドルノが言いたかったのは、対象が思考の規則に従わない場合のことだったのです。この場合に、アドルノは思考の規則に影響が及び、思考が思考としてありつつも、自分自身に反して思考できるようなものとして、否定弁証法を提案しているのです。ひきつづいて、アドルノの言うところを聞いてみましょう。

「思考の武器は、けっして持って生まれたままのものにとどまりはしない。それ以上に、思考は自分の論理的要求の全体性が眩惑でしかないことを見破るに十分能力すら具えている。一方で主観性は、事実的なものを前提とし、他方で客観性は、

主観を前提とするということは、一見したところ許し難い矛盾のように見えるが、それはただこうした眩惑にとつてのみ、すなわち理由と帰結の関係の実体化にとつてのみ許し難いものなのである。だが理由と帰結の関係は主観的原理であって、客体の経験はこれに従うとは限らない。」(171~2頁)

ここではアドルノは完全にカントの超越論的仮象論と、それをふまえた自然の合目的性論に依拠しています。カントによれば、理由と帰結の関係は悟性の法則であって、人間は自然について思考するとき、あたかもこの悟性の法則が自然そのものに内属するかのように仮定して思考するのです。だからアドルノの言うように、この自然法則は主観的原理で、客体の経験はこれに従うとは限らない、という考え方は、カントの哲学の応用なんですね。そして、ヘーゲルは、理由と帰結の関係を実体化することで思考の論理的要求の全体性が眩惑であることに目を閉ざしていたのです。つづいて、アドルノは述べています。

「弁証法とは、哲学的なやり方としては、狡知という古くからある啓蒙主義の手法を使って、パラドクスの結び目を解こうとする試みである。パラドクスがキルケゴール以後、弁証法の形態としては衰微したのは偶然ではない。弁証法的理性というものは、自然の連関と、論理的法則の主観的重圧の中に生き続けているこの連関の眩惑とを、それに理性の支配を押し付けることなしに超え出たい、すなわち犠牲も報復もなしにそれを超え出たいという衝動に衝き動かされている。」(172頁)

アドルノのこの衝動については、私も共有していますが、問題はこれを弁証法として規則化できるかどうか、ということなんですね。ここでアドルノが述べていることは、私にとっては、カントの超越論的仮象の発見による理性批判の立場から、ヘーゲルの弁証法をひっくり返そうとする試みの

ように見えます。でも結果が全てですね。いまはアドルノの取組みに期待をもって見守るしかありません。否定弁証法の概要を述べた一連の文の最後の部分に移りましょう。

「先の理性自身の本質も、敵対関係を含む社会と同様に生成したものであり、移ろい行くものである。無論この敵対関係は、苦しみと同様、社会だけに限った現象ではない。それでも弁証法は普遍的説明原理として自然にまで拡張されてはならないし、社会内の弁証法的真理とそれに無関係な真理という二種の真理を並立させてはならない。学問の分類になぞらえた社会的存在と非社会的存在との分離は、他律的な歴史の中には、眼に見えない自然的野生性が永久に生き続けているという事実を覆いあざむくのである。」(172頁)

ここでアドルノは、弁証法を自然の説明原理にまで拡張してはならないと述べながらも、二種類の真理を並立させることを否定しています。というのも、自然的なもの和社会的なものの分離は、人間の社会の歴史のうちに「眼に見えない自然的野生性」が永久に生き続けているという事実を覆い隠してしまうというのです。このアドルノの指摘は読みようによっては、マルクスが価値形態論で展開した形態規定のことについて言及しているように思われますが、ここではこう述べておくにとどめましょう。

「こういう弁証法は、否定的である。この否定弁証法という発想によって、ヘーゲルとの差異が名指しされている。」アドルノはこの第4項目「無矛盾性は実体化できない」を閉じるにあたって、先の否定弁証法の概要をふまえて、ヘーゲル弁証法の概括的批判に移っています。それを要約してみましょう。

アドルノによれば、ヘーゲルにあつては、同一性と実定性とはひとつのことでした。だから非同一的なものと客観的なものを「精神」へと格上げされた主観性のうちにすべて封じ込めれば、それで宥和が生み出されることになったのです。でもアドルノは、この考え方に反対します。というのも、全ての個別的規定の内に働いている全体の力としての思考は、単にこの個別的規定の否定であるだけでなく、それ自身が否定的なもの、真でないものでもあるからです。

「もし存在者が全部そっくり精神から導出されるとなると、この命とりな宿命として、精神は、自分とはまったく相容れないものと思っているこの単なる存在者同然のものとなるほかはない。もしそうでもしなければ精神と存在者とは一致することはない。ほかならぬ、この飽くことを知らない同一性の原理こそ、異論を唱える者を弾圧することによって敵対関係を永遠化している当のものである。自分と同じでないものは一切容認しない者は、実は宥和を妨げているくせに、自分こそ宥和だと勘違いしている。何もかも同じにしてしまうこの暴挙は、自分が除去するところの異論を再生産しているのである。」(178頁)

アドルノの頭の中には、ヘーゲルとともにハイデガーの顔が浮かんでいたことでしょうか。ヘーゲルの同一性の弁証法に対してこのように拒否したアドルノは、第6項目の「崩壊の論理」で、ヘーゲル弁証法と対比する形で否定弁証法の特徴について述べています。次にそれを見てみましょう。

2) 思考の論理を崩壊させる

「ヘーゲルと決別しなければならない理由は、今もこうして矛盾が全体を捉えており、けっして彼の綱領通り特殊な矛盾として解消されていないことを考えれば、明白である。カント的な形式と内容の分離の批判者として、ヘーゲルは内容と分離しうる形式、事物と独立に適用されるような方法を持たない哲学を欲した。しかしそれでいて彼のやり方は、方法的だった。だが実際は、弁証法は方法に尽きるものでも、素朴な意味での実在でもない。それが方法でないというのは、思考が自分なりに何とかつじつまを合わせようと努める、あの同一性をまったく欠いたまだ宥和に達しない事態は、矛盾に満ちていて、統一的に解釈しようとするあらゆる試みに抵抗するからである。弁証法へとわれわれを誘うものは、この矛盾に満ちた事態であつて、思考の持つ組織欲ではない。また弁証法が単に実在的なものでないというのは、矛盾性は反省のカテゴリーであり、思考しながら概念と事物とを突き合わせることだからである。主体的態度としての弁証法とは、いったん事態のうちに矛盾を経験したら、その矛盾のために、それにあれこれ異論を唱えながら、思考することを意

第3章 ヘーゲルのカテゴリーの批判

1) 同一性

これまでアドルノの否定弁証法的前提、概要、そしてヘーゲル批判をみてきましたが、そこに見られたものは、ヘーゲル弁証法に対するイデオロギー的批判、つまり、ヘーゲル弁証法のイデオロギー性を暴き立てる、という形になっていました。それはそれで面白かったのですが、でもイデオロギー的批判に終始したのでは一寸もの足りない気がします。でも、今まででやっと最初の6項目を見ただけで、あと第2部だけでも26項目も残っています。さらに、ヘーゲル批判としては第3部に27項目が追加されているのです。

本当は、どの項目も面白く、同じような調子で紹介していけばよいのですが、私自身の年齢を考えれば、アドルノにあまり長くつきあってもいられません。それで、第2部の残りの項目については気にいったところを取り出してコメントしていくことへと転換します。

まず、7. 同一性の弁証法について、の冒頭では次のように述べられています。

「思考がさしあたり自分と対峙している概念をこのように深く省察し、そこに内在するアンチノミー的性格をかぎつけると、思考はもうこの矛盾の背後にある〈あるもの〉という考えから離れられなくなる。思考とそれとは異質的なものとのこの対立は、思考自身の中で思考の内在的矛盾となって再生産される。普遍者と特殊者とは互いに相手を批判し合うことが、この特殊者と概念との非同一性を考えるための媒質である。すなわち、それは、一方が、概念がそのもとに包摂したものを正当に取扱っているかどうか、他方では、特殊者がその概念をちゃんと実現しているかどうかを判定する二つの確認行為である。」(178頁)

思考が存在と思考との非同一性に気づき、〈あるもの〉という考えから離れられなくなると、思考はどのような変化をこうむるのでしょうか。アドルノによれば、思考と〈あるもの〉との対立は「思考自身の中で思考の内在的矛盾となって再生産される」とされます。その際、普遍者と特殊者

とが互いに相手を批判し合うことが必要なのですが、それは平たく言えば、概念がそのもとに包摂したものを正当に取扱っているかどうか、また他方で、特殊者がその概念をちゃんと実現しているかどうかを判定する二つの確認行為だ、ということです。このあと、アドルノは、思考から離れ、人間の同一性、という問題で先の考え方を論証しています。

「交換原理、あるいは人間的労働の、平均的労働時間という抽象的普遍概念への還元は同一化原理と同根である。交換は、同一化原理の社会的モデルであり、同一化原理がなければ、交換もないだろう。すなわち、非同一的な個々人の存在や働きは交換を通じて共通の尺度で測れるものとなり、同一的となるのである。この原理の拡大は全世界を抑え込んで、否応なく同一的なもの、全体にしてしまう。」(178~9頁)

このアドルノの交換原理の捉え方には疑問を感じます。アドルノの見解だと、全く非同一的なものとしてある個々人の労働に対して、平均的労働時間へ還元する力をもつものを交換と捉えていることになりませんが、そうではないですね。たしかに原初的交換の場合には、こういった事態は起こりますが、しかし交換原理が支配的な社会では、個々人の労働自体が非同一的なものと同一的なものとの二重物になっているのです。

アドルノのような交換原理の把握では、〈あるもの〉の側の矛盾を捉え損ねることになります。あるいは〈あるもの〉の側の運動を捉え損ねます。ここにアドルノの否定弁証法の限界が露呈しているのではないのでしょうか。というのも、アドルノが思考と存在との間に非同一性を見出したのはよいのですが、存在そのものの二重性、あるいは、非同一性と同一性とが社会関係のうちに現象している、といった見地には到達してはいないのです。アドルノが措定しているものは、あくまでも思考と〈あるもの〉との矛盾に限定されています。

ですから、アドルノが先の二つの確認行為を交換原理に適用すれば、それはまたもやイデオロギー的批判に終わらざるを得ません。例えば「等価

味する。もし矛盾が現実の中にあれば、弁証法はこの現実に対する異論となる。」(176~7頁)

アドルノによれば、矛盾は事態の方にあり、そして、思考が事態に矛盾を認めたら、思考は思考しながら概念と事態とを突き合わせる事が問われるのです。ヘーゲルの場合は、この概念と事物が、つまり、内容と形式が分離しないような方法、つまり双方を思考の運動ということで統一したのです。でもアドルノによれば、ヘーゲルの弁証法は方法的だということです。それは事物の方を概念の方に同化してしまう、という意味でそうなのでしょう。だからアドルノは事物の矛盾の方に思考を同化しようとしているのです。

そしてそうすることは、矛盾をこの社会のうちにあると見たら、弁証法はこの社会に対する異論となる、ということとなって現れるのです。

「だが、こういう弁証法はもはやヘーゲルと手を組むことはできない。この弁証法の運動は、個々の対象とそれらの概念との差異の中に同一性を求めようとするものではない。それどころか、この弁証法は同一的なものを疑ってかかっている。この弁証法の論理は、崩壊の論理である。すなわち、認識主観がさしあたりすぐ直面している諸概念の整然と組織され、対象化された姿が崩壊する論理である。これらの諸概念の主観との同一性は、偽り〔非真理〕である。この偽りとともに、現象に対する主観の先行的形式作用の方が現象のうちに非同一的成分、つまり『とるに足りない局面』よりも優先した地歩を占めることになる。」(177頁)

アドルノがここで「崩壊する論理」というとき、いったん思考のうちで組み立てられた体系的な論理を崩壊させていくのが否定弁証法だと言いたいのです。アドルノによれば、この崩壊する以前の論理は偽りであり、それは個物をとるに足りないものと見て、非同一的成分としての〈あるもの〉を切り捨てているのです。

では既存の体系を崩壊させるにはどうすればよいのでしょうか。それは先には〈あるもの〉、非同一性を弁証法的前提におくこととされてきましたが、ここでは、崩壊する以前の論理によれば「一見無矛盾に見える個別的規定のおのおのが実は矛

盾に満ちていることが明らかになる」(177頁)というところに求められています。

「全体性の総体の展開のうちその分裂と偽りをも証示しうる人、こういう人だけが観念論の呪縛圏を超え出ているのである。純粋な同一性などというものは、主観が措定したもの、その限りにおいて外から持ち込まれたものである。それゆえ、この同一性を内在的に批判するという事は、逆説的な話だが、それを外から批判することでもある。主体は、これまで、自分が非同一的なものに加えてきた犯行の償いをしなければならぬ。それによってはじめて主体は、自分が絶対的な自立存在であるという仮象から自由になる。それはこの仮象そのものが、自分の造り出した種や類のサンプルへと事物を引き下げれば引き下げるほど、ますます主観的付加物のない自立存在そのものを持つことになると錯覚している、同一化する思考の産物だからである。」(178頁)

ヘーゲル弁証法の批判としては、非常に鋭く、かつ説得力があります。ヘーゲルは非同一的なものに対して外から(思考の方から)純粋な同一性をもちこみ、〈あるもの〉を無視する、という形で、非同一的なものを同一化したのです。そして、こういう犯行を犯すことによって、主体は、絶対精神、つまりは絶対的な自立存在であると宣言できたのです。

このヘーゲルの概念のお城は、しかし、逆立ちしていたのです。もし、思考にとってそれと非同一的な存在を〈あるもの〉として措定し、思考がこの自らと非同一的なものに向き合って、思考の論理を崩壊させていけば、このヘーゲルの概念のお城は、錯覚であることが判明します。でも、アドルノは、強調してはいませんが、カントなら、この錯覚は、思考が同一化しようとする本性を内属させている以上、思考につきものの錯覚で、思考する限りはそう見えてしまう、と付け加えるでしょう。

交換の本質は古来、ほかでもなく等価交換の名のもとで等しくないものが交換され、労働の余剰価値が着服されるということだったからである。」

(179頁) といった指摘にみられるように、あるいは、同一化原理を単に否定するだけでは暴力が復讐するだけと見て、同一化原理を次のように批判するときにも。

「思考の同一化原理としての交換原理の批判が意図するものは、今日まで単なる言い逃れでしかなかった自由かつ公正な交換という理想が本当に実現されることである。そのみが交換を超え出させるのである。……いかなる人間もその生き生きとした労働の一部を不当に横領されることがないとなつてはじめて、合理的同一性なるものが達成されるのではなからうか。」(179頁)

ここでアドルノは同一性という概念が、そのもとに包摂したものを正当に取扱っているかどうか、そして他方で、包摂されたものがその概念をちゃんと実現しているかどうか、という二つの確認行為を交換原理に対して行っているのようですが、その結論は、資本が廃絶されなければ、合理的同一性なるものは達成されない、という見解になっています。このような批判に終わってしまえば、それは一寸不毛ですね。でも、次の文なんかは、けっこう鋭い批判です。

「どのような総合のうちにも、同一性への意志が働いており、同一性は、思考に内在するその先天的課題として、積極的に、かつ望ましいものとして現われている。すなわち総合の基体は同一性によって自我と有和する、ゆえにそれは善である、とみなされる。このことが次に主体は、その物が自分のものであると見なされれば自分とは異質的なものに服従してもよいのかという道徳的未解決問題をあっさり容認させてしまう。」(180頁)

最後の一文に注目して下さい。ここで「自分とは異質的なもの」を資本と置き換えてみると、現代社会への道徳的批判がなされていることがわかります。とまれ、ここまでのところで明らかとなったのは、アドルノの目標はイデオロギー的批判だった、ということですね。

「主体はいま自分の理性に反してまで、理性を仮定しなければならぬ。イデオロギー批判がけっして末梢的問題や学問内部の問題、つまり客観

的精神とか、主観的精神の所産とかに限られた問題ではなく、哲学の中心的問題であるのは、このためである。つまりそれは構成的意識そのものの批判なのである。」(181頁)

アドルノのイデオロギー的批判とは、実は、構成的意識そのものの批判、ということでした。この批判は次項目の 8.思考の自己反省 でなされています。それに移りましょう。

2) 思考の自己反省

冒頭で、カントの理性批判を継承し、批判的理性について次のように述べることから、構成的意識への批判が始められています。

「意識には、自分が自分を欺いていることを見破るだけの力が十分備わっている。おのれの分を逸した野放図な合理性がどこで虚偽となり、本当に神話となるかは合理的に認識することができる。合理的理性は、その必然的な歩みのうちで、たとえいかに希薄化されてもまだ残っていたその基体の消滅が、自分自身の所産、すなわち理性の抽象作用の仕業であることを見失うや否や、非合理性に転化する。思考が無意識のままその運動法則に従ってゆくと、それはさまざまな主体志向の逸失を防ぐ『思考によって〔主体的に〕思考された所産』というおのれの本分に背くものとなる。思考の自給自足を厳しく命じることは、否応なしに思考を空虚にする。そしてその空虚さは、ついには主体の態度として蒙昧さと原始的単純性になる。意識の退行は、意識の自己省察の不足が産み出すものである。自己省察を加えれば、同一性原理をも見破ることはまだできる。しかし同一化なしには思考できないし、すべての規定は同一化である。」(181～2頁)

アドルノによれば、自分が自分を欺いている、ということ意識が合理的に認識するためには、思考とは異質なあるもの>を意識のうちで消滅させないことが必要なのです。逆にこれを消滅させることで構成的意識が形成されるとアドルノは見ているのです。ところで意識が自己省察することで同一化原理を見破ったとしても、同一化なしには思考できない、という問題に突き当たります。アドルノはまさにこの問題に対してどのように対応するのでしょうか。

「だが、まさにこの同一化こそ、非同一的なものとしての対象の本質に迫るものである。というのは同一化は、非同一的なものをそれとして際立てることによって、自らも非同一的なものから際立たせられようとするからである。非同一性は同一化がひそかに狙っている目標である、同一化において真に救われるべき対象である。伝統的思考の誤りは、同一性が思考の目標だと思い込んだことである。同一性の仮象を粉碎する力は、思考自身の力である。つまり思考が〔ある個物について〕『それは何々である』と言うとき、一般的には避けられない〔同一性という〕思考の形式は揺り動かされるからである。非同一的なものの認識は、まさにこの認識が同一性思考以上に同一化し、かつ別な仕方でも同一化するという点においても弁証法的である。この認識が言おうと欲するのは、あるものが何であるかということである。これに反して、同一性思考が語るの、それが何に属するか、何の範例、ないし代表であるかということ、したがって、このもの自身とは別なものである。同一性思考は、対象を見境なく責め立てれば責め立てるほど、その対象の同一性からますます遠ざかる。同一性の批判によって同一性が消滅するわけではない。同一性は質的に変化するのである。そこでは対象の思想に対する類縁性のさまざまな要素が生きてくる。」(182頁)

同一化なしには思考できないし、すべての規定は同一化なのに、どうして非同一的なものを思考のうちに含めることができるのでしょうか。アドルノはこの間に、同一性を質的に変化させること、非同一性を同一化の目標とみなすこと、という答えを出しています。このことは端的に言えば、ある個物についての認識について「あるものが何であるか」と答えようとするのだ、とアドルノは述べています。これに対して同一性思考は、あるものを「何に属するか」とか「何の範例ないし代表であるか」というようにそのもの自身とは別のものに同一化してしまう、というのです。

「伝統的哲学は自分と似ていないものを自分とよく似たものにするによって、この似ていないものを認識できると思い込んでいるが、哲学はそれによって本当はただ自分自身を認識しているにすぎない。変革された哲学の理念は、哲学が似

たものを自分と似ていないものと規定することによって、この似たものを知ることであるとも言えるかも知れない。」(183～4頁)

これも金言ですが、しかし、実際どうすれば非同一的なものを同一化の目標にして思考することができるのでしょうか。次に第9項目、矛盾の客観性に移りましょう。

3) 矛盾の客観性

アドルノが客観的矛盾と呼んでいるものは、普遍と特殊の間の矛盾であり、また、自由の概念と自由の実現との間にある矛盾です。ということですから、これは、思考と存在との間にある矛盾に他なりません。客観的矛盾など論理的に認められず、そんなものは判断の形式的な一致によって除去しなければならぬ、といった通常の哲学的立場をひきあいに出しつつ、アドルノは次のように述べています。

「しかし客観的矛盾ということは、単に判断の外に依然として残っている存在者の矛盾性を指示しているだけでなく、判断された事態そのもの内に何か矛盾したものがあることをも指示している。なぜなら判断は、その判断の中にとり込まれた特殊な存在を超えた存在者を判断すべきものとして常に狙っているの、そうでなければ、それ自身の意図から言って、判断などなくてもいいのである。そしてまさにこの意図を判断は満たさない。」(185～6頁)

アドルノによれば、客観的矛盾というのは、判断の外に取り残されている存在者の矛盾性ということだけではなく、判断の形式が狙っている思考のうちに取込まれてはいない<あるもの>についての認識を判断が実現しえていない、ということなのです。そして、アドルノにとっては後者の矛盾、これは思考と存在との間の矛盾に他なりません。こちらの方が問題なのです。

「客観的矛盾とそのさまざまな流出物を意識は自分の方から概念的な操作によって消去することはできない。矛盾を概念的に把握することはどうにかできようが、それ以外は空虚な安請け合ひである。

矛盾は今日、最初にそれを幻視したヘーゲルにとってより、はるかに重たい意味を持っている。

かつてはそれは全体的同一化を促進する手段だったが、今はこの全体的同一化の不可能なことを認識するための器官となっている。弁証法的認識というものは、それに反対する人たちが難じているように、上から天下りの様々な矛盾をこしらえあげ、それを解決することによって前進するようなものではない。たとえヘーゲルの論理学がしばしばそういう風に進むとしても、そうではない。目下、弁証法的認識に課せられているものは、そうしたことなく、思想と事態との不一致を追求すること、その不一致を事態に即して経験することである。」(186頁)

アドルノによる構成的意識に対する批判の方法は、ここでは思想と事態との不一致を追求すること、その不一致を事態に即して経験すること、と述べられています。この結論は正しいとしても、これを實現しようとすれば、アドルノが重視してはいない存在そのものの矛盾についてきっちり捉えておくことが問われるのではないのでしょうか。アドルノは、思想と事態との不一致を事態に即して経験する、と述べているわけですから、その際に事態そのものの矛盾が捉えられていなければ、アドルノのもくろみも空虚な安請け合いにならざるをえないのではないのでしょうか。アドルノが構成的意識に対する批判について執拗に述べているにもかかわらず、何かしら袋小路に入っているように思われるのは私だけでしょうか。

4) 否定弁証法概念

ところで、アドルノは次の2項目では再び弁証法についての定義を行っています。10.概念からの出発、11.総合、とからその定義を引用しておきましょう。

「弁証法とは、その主観的な面から言えば、思考の形式がその対象をもはや不変かつ自己同一的なものにしないような仕方でも思考する、ということに尽きる。対象がこうした自己同一的なものであることは、経験に反するからである。」(188頁)

「弁証法とは、客観的には同一性の強圧を、その内に蓄積されさまざまに対象化した姿で凝固しているエネルギーによって粉砕することを意味する。」(182頁)

このように、アドルノの期待はどんどん思考の外にある事態、あるいは存在の方へ移っていきます。アドルノにとって思考とは対象に対して同一性の強圧をかけることに他なりませんから、この思考を変えていくには、事態の側からの非同一化の要請に依拠する他はないのです。『同一性を通しての非同一性の意識』というように弁証法を捉えたアドルノは第12項目、肯定的否定の批判、のところで、ヘーゲルの否定の否定の論理の批判を試みています。

「非同一的なものは、それ自身で肯定的なものとして直接に手に入れることは出来ないし、否定的なもの否定によっても手に入れることはできない。この〔否定的なもの〕否定はそれ自体、ヘーゲルの言うのとは違って、肯定ではない。……否定の否定と肯定性の同一視は同一化の最たるものであり、形式的原理が最も純粋な形式にもたらされたものである。」(194頁)

非同一的なものは、それ自身で肯定的なものとしては認識できないし、また否定的なもの否定によっても認識できない、と主張するアドルノは、ヘーゲルが否定の否定によって肯定的なものへと移行するとした否定の否定の論理に批判を加えています。否定の否定と肯定性の同一視は同一化の最たるものだ、というわけです。アドルノは、否定の否定はあくまでも否定的であり、もしこの否定に肯定的要素があるとすれば、それは限定的否定、すなわち批判のみであろうと述べています。

アドルノにあつては、「否定の否定」の最初の否定は、主観が対象に規定を与えることであり、これが主観によって対象が否定されることです。というのは、主観は対象を思考のうちに取り込むことによって、〈あるもの〉という残余を残しつつ、対象それ自体を否定するからです。では次の否定とは何でしょうか。それは他ならぬ主観に对象によって加えられる否定です。これは対象による主体の認識の否定ですから、思考にとっては肯定的なものとはなりません。アドルノが非同一的なものそれ自身は手に入れられないと言うとき、この非同一的なものとは、思考と存在との間にある関係性なんですね。だから、これは双方の間の弁証法のうちにひそんでいるわけで、それ自身を

とり出すことはできなかったのです。このアドルノの非同一性についての考え方のなかに、絶対的他性、という考え方が欠落しているのが気になります。ここではこの点を指摘しておくだけにとどめましょう。

「断固たる否定の真骨頂は、いま在るものの認可に加担しないという点にある。否定の否定はこの断固たる否定を撤回するものではない。そうではなく、それはこの断固たる否定が十分に否定的でなかったことを立証する。もしそうでなければ、弁証法は最初に行われた否定とは結局何の関係もないということになる。たしかにヘーゲルにおいては、弁証法によって最初の否定は全体に統合されたが、しかしその代償としてその活力を奪われねばならなかった。

いったん否定されたものは、消滅するまで否定的である。これが、われわれとヘーゲルとを決定的に分ける点である。拭いようもなく非同一的なものの表現である弁証法的矛盾をふたたび同一性によって平らに均すということは、この矛盾が意味するものを無視し、純粋な整合的思考へと戻

第4章 否定弁証法を超えて

1) 布置関係としての価値形態

ベンヤミンの造語に、アドルノによって新しい意味が与えられた布置関係、その前の項の個別的なものも究極的なものではない、でアドルノは、〈あるもの〉について、思考の外側から追求しています。

「存在するものは、単にそれであるより以上のものである。この『より以上』は存在者に外から押し付けられたものではなく、自分の中から追いつめられたものとして、あくまでもそれに内在するものである。その限りにおいて、非同一的なものは、事物を同一化する諸々の識別作用に逆らう事物自身の同一性であると言えよう。対象の最も深い内面は同時にこの対象にとって外的なものであることがそれによって明らかになるし、対象の閉鎖性は実は仮象であつて、同一化し、固定化す

ることと同じである。」(195頁)

ここでも述べているように、アドルノにとっての非同一性とは、その現象が弁証法的矛盾としてあらわれるものであり、従ってやはり思考と対象との間の関係として措定されているのです。だから、非同一性を思考する弁証法は否定弁証法とされているのです。そして、構成的思考の批判を實現するものはこの否定弁証法だというわけですね。

ここまで、アドルノの否定弁証法の論理を追ってき明らかなった疑問は、アドルノが客観的矛盾を存在や事態そのものの矛盾としてよりも思考と存在との間の矛盾として捉えているということ、非同一性を絶対的他性と捉える観点がなく、それを思考と存在との関係のうちにひそんでいるものと捉えている点でした。第14項目、布置関係の検討のところ、この疑問点を全面的に展開してみましょう。

思考法の反映にすぎないことも明らかになる。あくまでも個別的なものにこだわって思考してゆけば、そういうものに到達する。つまり、個別的なものを代表すると称する普遍者にはなく、その本質としてのあの内的であると同時に外的なものに到達する。」(198頁)

このアドルノの展開は、存在を、思考の内にとらえられた存在と、とらえられない〈あるもの〉との二種類と捉えることで、その意味が開示されてきます。存在するものは単にそれであるより以上のものである、という場合、「それ」は思考のうちにとらえられた存在のことです。だからより以上とは、思考によって外から押し付けられものではなく、逆に存在の中から思考によって追いつめられた〈あるもの〉のことなわけです。だから、存在と思考との関係を普通のように思考の側から見るのではなく、存在の方から見てみると、この

関係のうちで非同一的なものとは、事物を同一化する思考の力に逆らって事物自身に同一性があり、それがたえず思考によってとらえられた事物の中から追い出されることで成立するとみなせるのですね。

こうして、対象にとって最も深い内面は、実は思考のうちにとらえられた対象にとっては、外的なものとなってしまいますね。そこでアドルノはあくまでも個別的なものにこだわって思考すれば、個別的なものを代表すると称する普遍者にはなく、個別的なものの中に思考のうちにあるものと、その外にあるものとの統一が見出されると主張しています。そして、この統一を見出しうる契機が布置(星座)なんですね。

「こういう一致をもたらす契機は、『否定の否定』などなくとも、まして抽象を最高原理としてそれに身を委ねたりしなくても、なくなるわけではない。それは、いくつかの概念から段階を追って、さらに普遍的な概念へと進むのではなく、それらの概念が布置関係の中に置かれることで生きてゆく。この布置関係のもとでは、分類的やり方にとってはどうでもいいもの、ない厄介者にすぎない対象の特質が照らし出される。」(199頁)

ここでアドルノは思考による抽象作用や、構成的綜合作用や分類といった思考の論理にとつては、どうでもいいもの、あるいは捉えられない厄介者としてある対象の特質について述べています。そして、その特質は対象についての色々な概念が布置関係(星座を想像して下さい)の中に置かれたことで見えてくる、というのです。この布置関係についてのモデルを、アドルノは言語の働きに求めています。

「このことをよく示すモデルは、言語の働きである。言語は、さまざまな認識の機能のための単なる記号体系を提供しているのではない。言語が本質的に言語として現れるところ、すなわちそれが叙述となる場合、言語はその叙述に用いられる諸概念をいちいち定義しない。言語は幾つかの概念のある事物のまわりに集めて互いに関係づけ、その関係を通じてそれらに客観性を与える。これによって言語は、思ったことを完全に表現したいという概念の志向に仕える。概念がその内部でどうに切り捨ててしまったもの、概念がそれであり

たいと思いながら、なることができないこの『概念以上のもの』はただ布置関係によって、外から表すしかない。認識されるべき事物のまわりにさまざまな概念が集められると、それによってこれらの概念は潜在的に事物の内面を規定することになり、思考が必然的に自分の内から排除したものを、思考しつつ獲得することになる。」(199頁)

アドルノの念頭に置いている布置関係は、存在の様式のことであり、これと思考の論理との非同一性ということを出発点にして存在の様式に、思考がその本性としてもつ同一性を否定し、その様式に慣らされていく、という様子を描くことを試みるためのツールとして提出されているように私には思われます。そうであれば、言語の働きをモデルにするのはよくないですね。というのも、言語は意識の形態ですから、それ自体思考に属しています。実際アドルノは「認識されるべき事物のまわりにさまざまな概念が集められる」と述べていますが、言語の場合、概念を集めるのは思考なのです。

アドルノが布置関係のモデルに価値形態をおけば、議論はずいぶん異なったものとなったでしょう。そうすれば、布置関係とは、対象そのものの矛盾がつくり出す現象形態であることが半明するでしょう。この価値形態論を布置関係とみる見方からすれば、アドルノの提起をさらに発展させることができるのではないのでしょうか。

「客観は、それが置かれている布置の意識でもあるモノ論的固執に対して自己を開く。つまり内面への沈潜が可能となるには、あの外面が必要である。だが、個別的なもののそういう内在的普遍性は、蓄積された歴史として客観的なものである。この歴史は個物の内にあるとともにその外にもあり、個物を包括して、その中に個物を位置づけるものである。事物がおかれている布置関係を感知するということは、生成したものとして個物が自己の内に担っているものを解読するのと同じことなのだ。外面と内面の離存ということ自体が、歴史的に制約されている。対象の内に累積した歴史を解放できるのは、対象の歴史的位相すらも、その対象の他の諸対象との関係の中にまざまざと記憶しているような知だけである。いわばそれは、すでに知られているものの現在化と集中化である。

既知のものは、それによって変貌する。対象をその布置関係において認識することは、対象が自己の内に蓄積している過程を認識することである。理論的思想は、こうした布置として自分が聞きたいと思う概念を取り囲むのである。」(200~1頁)

ここでアドルノは、「事物が置かれている布置関係を感知するということは、生成したものとして個物が自己の内に担っているものを解読するのと同じことなのだ」と述べていますが、これは具体的事物に則して展開されていないから分かり難いですね。

例えば、この生成した個物を貨幣と想定して見ましょう。そうすると、貨幣が内に担っているものは、さしあたり購買力ですが、これを解読しようとするれば、商品の価値形態という布置関係を感知し、これを解明しなければならぬでしょう。商品の価値形態にあつては、商品の内なるものとしての価値は、その外としてある使用価値との統一がお互いに対立物へとわかれ反照しあう現象形態を生成させているのです。そして等価形態にある商品は、その使用価値が形態規定されて価値の化身となり、こうして、その使用価値がそのまま購買力をもつのでした。アドルノは、明確にはいませんが、外面と内面との離存とは、関係として存立するのであり、かつこの関係は内的なものの現象形態なのです。これは実は本質と現象との関係ですね。ヘーゲルによれば、本質は現象するのですが、アドルノは、第16項目、本質と現象、でヘーゲルの本質論の批判を試みています。

2) 存在の概念性

本質と現象について、アドルノは、本質はもはやヘーゲルのように純粋に精神的な「自体存在」として実体化できないとしつつも、他方でそれを事実の下に隠されたものとみなす考え方に対しては、その本質は非本質的なものだと述べています。なぜなら、この世界自体が人間をずたずたにし脅かすような、そういう世界ですから、その下に隠されているとされる本質も非道なものに他ならないというのです。ではアドルノにとっての本質とはどのようなものなのでしょうか。

「本質なるものは、存在者とそれが自らそうあると主張するものとの矛盾を介してのみ認識される。もちろん、いわゆる事実と違って、この認識もまた直接的なものではなく、概念的なものである。けれども、こうした概念性は、単なる『人為的なもの』ではない。つまり、その中に主観は結局自己自身の確証を見出すにすぎないような認識主観の所産ではない。そうではなく、この概念性は、たとえその把握が主観によるものであっても、概念的に把握された世界は主観自身の世界ではなくて、むしろ主観に敵対するものである、という事実をいいあらわしている。」(205頁)

アドルノはここで、存在するものの概念的構造について述べようとしています。でも布置関係と同様に事態に則して述べられていないので、やはり分かり難いですね。では、ここでも商品を例にとってみましょう。

商品の価値形態は、価値を等価商品の使用価値で表現させますが、このことは同時に、価値の大きさをも等価商品の使用価値で表しているのです。だから商品所有者は商品価値の現象形態については何も知らなくとも自分の商品の価値がいくら、ということは、商品を交換関係におくことで知ることができます。この時、商品の価値形態はどのような機能を果たしたのでしょうか。

ある商品の価値がいくらかということを決定しているのですが、それは商品所有者の思考に頼らず、商品相互の関係による決定です。ということは、ある商品が等価形態に置いた商品を価値としては自分と同じものであるとみなすと同時に等しい価値に相当する分量を選択しているのです。

商品の価値形態は、あたかも思考がそうするように、分析して価値という抽象的なものをとり出し、次にその量的規定を行って価値の大きさについての判断を提示しているのです。これは価値形態が概念性をもっている、ということに他なりません。アドルノも言うように、「こうした概念性は単なる人為的なものではない」のです。アドルノはこのあとヘーゲル本質論の批判にこだわっていますが、それは放っておきましょう。

次の項目、客観性による媒介、でアドルノは、主観的だとみなされていることも実は客観性によって用意されたものにすぎない、ということに注目

しています。

「こうなると本質と現象、概念と事物との媒介もまた元のままではなくなる。かつてはそれは客観のうちの主観性の契機だったが、もうそういうものと見なすことはできない。さまざまな事実を媒介するものは、それらを前もって形成し把握する主観的メカニズムというよりも、主観が経験できるものの背後にある、主観にとって他律的な客観性である。」(209頁)

存在そのものが概念的であるとすれば、人間の主観性も、実はこの客観性に媒介されそれに支配されるのではないか、というのがここでのアドルノの提起です。というのも今日の人々の判断は、あまりに主観的すぎる、と言われている場合でも、「全員の合意」を自動的に復唱しているにすぎないからです。

「目下、個々の主観の内では客観化されたものが優勢を占め、個々の主観が主観となることを妨げているが、それは、また客観的なものの認識をも妨げている。これが、かつて『主観的ファクター』と呼ばれたものなれの果てである。今日では、媒介されているのは客観性というよりも、むしろ主観性の方である。そして、こういう媒介こそ、従来の媒介よりももっと緊急に分析する必要があるのである。

今や、この客観性の媒介が主観的な媒介メカニズムの中に伸びてきて、すべての主観が——超越論的主観すらもが——その中に組み込まれている。さまざまなデータが注文通りに知覚されるように取り計らっているものは、この前主観的秩序であり、この秩序そのものが、認識論にとって構成する主観性にほかならない主観性を、本質的に構成しているのである。」(209～10頁)

主体的判断だと考えられている事柄が、実は客観性としてある前主観的秩序によって構成されている、というアドルノの考え方は、物象による意志支配のメカニズムを解くことで始めて一般化できるでしょう。アドルノのこの場での展開にとどまるならば、それは文学的、芸術的な批評か、精神分析に救いを求めるか、ということにならざるを得ないでしょう。でも、せつかくアドルノが切り拓いた地平を批評や精神分析にまかせてしまうのはいかにも残念です。アドルノが言いたかった

ことを、文化知の観点から補足してみましよう。

すでに私は、アドルノが布置関係のモデルに言語の働きをもってきたことに意義をとらえ、これを商品の価値形態に置き換えてみました。そうすることで事物の内面と外面との関係を価値の現象形態へと展開し、そうすることで、存在の様式と思考の論理とのちがいについて、具体的に例示することができました。

次に本質と現象との関係について、アドルノがヘーゲル本質論の批判を提起することを通して、思考の概念性とは別の存在の様式概念性について明らかにしようとしている作業に、商品の価値形態という客観的なものが、思考と異型ではあるものの、同じ概念的様式をもつことを付け加えておきました。これらをふまえて、商品という物象による意志支配のメカニズムがここで明らかにされねばなりません。

商品が概念的な存在であると言っても、それは人間主体と切り離されたままではそうはなりません。そもそも、商品とは人間の社会性ですから、それは人間主体と切り離されたものとしては存在しようがないのです。アドルノの内と外の比喩を借りるなら、商品の内は人間性であり、外は物性でした。だから、商品の概念性とは、商品としての物性的なものの布置関係が概念性をもっているのです。そして、この概念性は、商品所有者が、この布置関係に意志を宿すことで概念となるのでした。

商品をこのような人間の社会性と捉える見地から、商品世界からの貨幣の生成が漏みられなければなりません。商品所有者は、誰でも自分の商品で他の商品が買えたらいいと考えますよね。自分の商品が貨幣であれば、こんな楽なことはいない。ところが、全ての商品所有者がそのように行動すれば、どの商品も貨幣になれず、従って、商品世界は交換不能の世界となってしまいます。ところが商品の価値形態は、単一の商品で他の全ての商品が自分の価値を表現すれば、他の全ての商品がこの単一の商品で買えることになり、そのことで商品世界は統一的な秩序を保つことができることを示しているのです。この布置関係に商品所有者が自分の意志を宿したとき、貨幣が生成されます。このような関係にあつては、主体であ

る商品所有者の判断は、主体の前にある客体の布置関係の概念性に支配されたものとなっていきますね。

3) 物象化と物神性

アドルノは、客観性による媒介の項で、執拗にヘーゲル弁証法の批判を行っていますが、物象による人格の意志支配の様式を取り出すことができず、ヘーゲル批判にはそれほど重きを置かなくてもよいでしょう。ということで、次にアドルノが重視している客観の優位という問題に移りましょう。

主観と客観との関係について、アドルノは第19項目、主観＝客観の弁証法について、で展開していますが、その結論は「認識論的反省の歩みは、その支配的傾向からすれば、客観性に関してはそれを次第に主観へと還元する歩みだった。だが、まさにこの傾向こそ逆転されるべきなのではあるまいか」(216頁)ということでした。そして、客観は主観になりえないが、主観は客観に十分なりうる、とする支配的傾向がなかなか覆されなかったのは何故でしょうか。アドルノはそれを客観がもつ魔力に求めています。

「主観は、その支配権の行使にあたって、ヘーゲルの『主人』と同様に、自分が支配していると思っているものによって、ある面で打ち負かされる。客観を根絶しようとする、主観はますます客観に従順にならざるを得ないということは、このヘーゲルの『主人』のうちによく示されている。主観は客観を自分の魔力の内に封じ込めたと思っているが、その主観のなすことすべてが、実は自分が封じ込めたと錯覚している客観の魔力のなせる業なのである。主観の絶望的な自己誇大化は、おのれの無力さの経験に対する反動であり、それが自己省察の妨げになる。つまり絶対的意識は、おのれを意識していない。」(220頁)

このように、客観の魔力について述べているアドルノは、しかし、その魔力の中味については明らかにしていません。それはせいぜい主観の魔力の批判という否定的な形で展開されているにすぎません。でも、この客観の魔力の中味こそ、商品という物象による人格の意志支配、つまり物象化が必然的に人間の頭の中に生み出す物神性のこと

なのですね。

物象による人格の意志支配がどのような観念形態を人々の頭の中に発生させるか。価値形態論の最後のツメとして、この問題をとりあげましょう。商品の価値形態は等価商品を価値の化身とすることで、この等価商品の商品体そのものに購買力という社会的力を付与します。この社会的力は、商品の価値関係の内部でだけ生じているものなのですが、しかし、価値の現象形態は人間の感性にとっては捉えられず、そこにあるものは二つの商品体の関係だけですから、商品に意志を宿した商品所有者にとっては、この購買力が物としての商品それ自体にそなわっているように見えます。

例えば、貨幣商品金は、全ての商品が金で価値を表現する、という商品所有者の無意識のうちでの本能的共同行為にもとづいて、一般的購買力という社会的力をもつのですが、これが、人間の観念のなかでは、金という素材自身に購買力があるかのように見えるのです。ところが、アドルノは、商品の物神的性格や、物象化について言及しているのですが、一寸ずれています。

「経済の優勢な力は、けっして恒常不変なものではないからである。とにかく思考は、物象化の解体、つまり商品的性格の解体によって万事が解決すると安易に想像しがちである。だが物象化そのものは、間違った客観性の反省形態である。そして、意識形態である物象化を理論の中心に置くことは、支配的な意識や集団的無意識が批判理論を観念論的に受け入れることを可能にする。……

物象化について声を大にして欺くだけでは、人間を苦しめている当の体制を告発するどころか、いつしかそれを滑り越えてしまう。災いは、人間を無力で無感動なものに貶めている諸関係、それもやはり人間によって変革されるべき諸関係のなかにあり、第一次的に人間のなかに、それらの諸関係が人間に現象する仕方のなかにあるのではない。」(23～3頁)

ここでアドルノが言及している「物象化」の原語が、本当に「物象化」なのか、あるいは「物化」なのか、調べる余裕は今はありません。しかし、この文脈では、アドルノは明らかにこの「物象化」を「物化」という意味で用いています。というのも、マルクスにあつては、物象化とは、人間の意

識に現象する当の客体的な諸関係のことであり、それが、物化として意識されるから、物神性論が成立していたのでした。ここでのアドルノの提起を物化についてさざたてたルカーチへの批判として読む限りでは否定すべきものはありません。でも「物象化そのものは、間違った客観性の反省形態である」としてしまうと、せっかくアドルノ

が客観の優位を主張し、それを思考の外から捉えようとしている当の「あるもの」を見失ってしまいます。物象の人格化と人格の物象化こそは、客観的諸関係そのものことなのですね。なお、物象化と物化との区別がマルクスの価値形態論解説の前提であることについては『価値形態・物象化・物神性』を参照してください。

第5章 補論

1) 清水多吉のアドルノ論

アドルノの否定弁証法は、このあと、唯物論への移行、弁証法は知識社会学ではない、精神の概念について、純粋な活動と天地創造、身体的苦痛、唯物論は図像化しない、という6項目が続きます。しかし、価値形態論をふまえない唯物論や社会批判には興味をもてませんので、否定弁証法を扱う作業はここで終わることにします。でも、今回検討したのは、その核心部分ではあるといえ、この本の5分の1なんですね。他にも魅力ある論点や引用したい金言がたくさんあるのですが、それはあとに続く研究者のために取っておくことにしましょう。

アドルノを読みながら、日本人のアドルノ論のいくつか目に通しましたが、まず『否定弁証法』についてのちゃんとした研究はなされていない、という印象をもちました。とりわけ、アドルノの非同一性が、思考と存在との非同一性だ、という最も根本的なことすら研究者には理解されていないですね。

例えば長年フランクフルト学派について研究してきた清水多吉は、「フランクフルト学派とわが『情況』」(『情況』1999年11月号所収)でアドルノの否定弁証法について次のように述べています。

「鏡に映った『私』に向かって『違う!』と言ったことはないだろうか。この『違う!』が『非同一的なもの』である。……ところで、以上のような『非同一的なもの』の追求は、旧来の学知の体系に対して、鋭い批判の刃にはなるが、みずから新しい学知の体系とはなりえない。」(『情

況』22~3頁)

清水によればアドルノの「非同一性」とは「私」が「私」として同一的なものであることについての違和感だ、ということですが、これは端的に言って差異のことです。この種の差異ならヘーゲルも認めていて、弁証法は対立物(差異)の統一(同一性)として叙述されているのです。アドルノは、このような思考のうちでの差異性を「非同一性」と見たのではなく、思考と存在とを「非同一的」なものとすることで思考の同一化しようとする力を批判しようとしたのです。

この基本的なアドルノの構えが理解できていないから、清水はアドルノの「非同一性」がデリダの差延にひきつがれたと見てしまうのです。でもデリダには思考と存在の非同一性という思想はないですね。デリダの差延論は真理性についての独自の見地からの形而上学批判であって、アドルノのように存在するものの様式に合わせて思考の論理を組み替えるといった発想はありません。なぜ清水はアドルノの「非同一性」について理解できなかったのでしょうか。それは清水が絶対的他者性ということについて認めることが出来ないからではないでしょうか。同じ論文で清水は次のように述べています。

「差異性のあるものに対面して、こちらが納得するのは、差異性のあるもののなかに同一性を認めた場合である。それは、他者に対面した自己が自己のなかに同一の他者を認めるというあの認識論の基本図式と符合する。同一性の認められないまったくの他者性、差異性との共存は、まったく関係のない共存であり、それは、共存だとか共生だということ自体形容矛盾のあり方なのだ。」

(16頁)

清水の認める差異性とは同一性を前提にしたものなのですね。そして、これが認識論の基本図式と符合している、と見ているわけですから、実は人間の思考によって思考されたものの中にある差異性だ、ということになります。でも、アドルノは、存在についての人間の思考がとり込むことのできない「あるもの」と思考との間に非同一性を見出しているのです。絶対的他者性といっても全く関係のないものではないのです。そもそも他者という概念自体が自己との対概念であり、自己との関係を前提にしているのです。だから絶対的他者性とは、自己が他者を思考のうちに認識したとき、この認識にとっての他者性を絶対的

他者性と表現しているのです。

この他者の絶対的他者性をアドルノは思考と存在との非同一性というところに見出したのです。だからアドルノの「あるもの」は、レヴィナスの顔に相当するものと見なせます。

たしかに、カント、ヘーゲル、マルクスをふまえたアドルノの議論は非常にオーソドックスなところがあります。でも非同一性論に限っては、時代を超えています。だから清水のように「アドルノの批判知は空振りに終わる可能性が高い」(23頁)と見るのは、自分の理解の水準に合わせてアドルノを切ってしまった結果であって、見当はずれのように思われます。

哲学の旅第5回(続)カント研究序説

はじめに

カント研究序説はあれで完結させることにしていましたが、スタデイユニオンでセミレクチャーでカントについて発表の機会を与えられたので、カントの物自体論の批判を試みてみました。

カントについては全くの素人ですから、カント哲学批判について独立の論文を書くには準備ができていません。それで「カント研究序説」の続編として書くことにしました。

第6章 物自体論の批判

1) 超越論的仮象論再説

カント哲学の批判を試みるにあたり、もう一度カントの根本思想である超越論的仮象論に立ち帰りましょう。

「超越論的仮象は、仮象であることがすでに発見され、またその取るに足らないものであることが超越論的批判によって明らかに見抜かれても、それにも拘らず依然として仮象たることをやめないものである。」(『純粹理性批判』岩波文庫中巻、15頁)

「超越論的弁証論において我々が取扱うのは

「人間理性にとって」自然的な、従ってまた我々にどうしても避けることが出来ないような錯覚である。そしてこの錯覚は、もともと主観的原則に基づくものであるにもかかわらず、これを客観的原則とすりかえるのである。」(同、16頁)

すでに『判断力批判』の自然の合目的性について見てきた上に立てば、カントの超越論的仮象論の言わんとしているところは明らかですね。もちろん『判断力批判』はずっと後に書かれたものであって、『純粹理性批判』が書かれたときには存在していなかったものですが、カントは超越論的仮象論の立場を自然についての認識能力の批判に

まで展開したのでした。

カントによれば、自然の合目的性とか合法則性と述べるとき、それは超越論的仮象に則した言い方なのですね。だから自然に属しているかのように見える合目的性の原理や合法則性は人間の思考(反省的判斷力)の原理に他ならなかったのです。そして、人間は自分の思考に属している合目的性や合法則性が実は自然そのものもそのようにあると仮定することによってしか自然を認識できないのでした。

同様の思想は『純粹理性批判』にあっても既に述べられています。人間が、自然に属するかのようには錯覚している自然法則とは、生起する一切のものはいずれも原因をもつ、というのですが、カントによれば「現象はかかる自然法則によって初めて自然となりまた経験の対象たりうる。なおこの法則は悟性の法則である。」(同、215頁)とされているのです。

つまり、カントは現象のみならず、合目的性や自然法則も、それが自然に属しているようにしかみえないにもかかわらず、このように見えるのは錯覚であって、じつは人間の思考に属しているものだと主張しているのです。このことが『純粹理性批判』第2版序でカント自身が述べているコペルニクス的転回の内容であって、この地平に立つことでカントは従来の形而上学のアポリアを超えたのでした。カント自身は序で次のように述べています。

「もし直観が、対象の性格に従って規定されねばならないとすると、私はこの性質についてア・プリオリに、何ごとかを知り得るのか判らなくなる。これに反して(感覚の対象としての)対象が、我々の直観能力の性質に従って規定されるというなら、私には直ちにこのことの可能がよく判るのである。」(同、上巻、33頁)

カントがなしとげた事は、感覚の対象が人間の認識能力に従って規定されると仮定することで、人間の認識能力について述べる事が可能になり、それを理性批判として展開したのでした。

2) アンチノミーの理念論的展開

さて、カントは純粹理性の四組のアンチノミー

(二律背反)を提出し、正命題と反対命題が同じように証明できることを示しています。例えば第一命題は時間と空間に関するもので、次のように両命題が提出されています。

正命題「世界は時間的な始まりをもち、また空間的にも限界を有する」

反対命題「世界は時間的な始まりはもたない、即ち世界は時間的にも空間的にも無限である。」

(中、106頁)

カントはこの相反する命題を同程度のたしかさで証明してみせるのですが、そうすることによって、自身の超越論的仮象論の正当性を主張しようとしているのです。というのも、もし人間の認識が客観に属するとすれば、それはどちらかの命題に一義的に決定されてしまうことになります。そこでカントは人間の認識が客観に属するのではなく、主観に属するとすることでアンチノミーの成立を承認したのでした。では何故人間の認識に正反対の命題が成立し得るのでしょうか。カントは自らが独断論と名づけている正命題が選ばれる際には三つの関心が関与しているとしています。ひとつは実践的関心(カントにあつては道徳と宗教のことです)であり、二つ目は理論的関心であり、三つ目は通俗性を意味する常識的関心です。反対命題をカントは経験論と名づけていますが、これは一定の制限を守れぬ独断論の毒を解毒する役割をはたせるものとみなされています。

ところでカントはデタラメに四つのアンチノミーをとりあげたわけではありません。これら宇宙論的問題とはカントにあつては経験を越えたものであり、従って問題解決を経験によってなしとげることができないものなのですが、しかし、これらの問題自体を現象とみなすと、これは実は人間の思惟であり、それは物自体としての人間の心由来しているものなのですね。だから、逆に見れば、宇宙論的問題は人間の理念が原因となって提出されているのです。だから、カントは、アンチノミーの問題を理念論として捉えることで現実的な解決をもたらしようと考えたのでした。

そこでカントは人間の理性にたいする懐疑論の立場を導入し、アンチノミーが単に思考によって作り出された空虚な概念を根拠にしているのでは

ないか、という疑念を提出しています。この疑念に対して、カントは「空間そのものもまた時間も、それからこの形式と共に一切の現象も、それ自体物ではなくてまったく表象にほかならない、つまりこれらのものは、我々の心意識のそとには決して実在しえない」(中、169頁)と論じることで疑念を封じ込んでいます。つまり四つのアンチノミーは、現象やその一切を総括する感覚界を誤って物自体と捉えてしまうと、それはごまかしの詭弁ではなく、人間理性の自然的本性にもとづく根拠のある主張となるからなんです。

カント自身はもっと細かく論理だつて論じていますが、人間が世界を認識しているとき、この世界は現象であり、人間の主観に属し、人間の思惟の法則に支配されたものであつて、この世界は決して物自体ではない、そして、この世界を誤って物自体とみなすことからアンチノミーが生じる、というカントの説明はなかなか説得力があります。ではこのカントの自信作である物自体論はどこが間違っているのでしょうか。

3) 自然と自由

カントの物自体論の批判を試みようと思つたとき、やはり自由を論じた第三アンチノミーを検討することから始めるべきですね。カントは第三アンチノミーの正、反命題について、それぞれ次のように述べています。

正命題「自然法則に従う原因性は、世界の現象がすべてそれから導来せられ得る唯一の原因性ではない。現象を説明するためには、その他になお自由による原因性をも想定する必要がある。」(中、126頁)

反対命題「およそ自由というものは存在しない、世界における一切のものは自然法則によってのみ生起する。」(中、126頁)

ここでカントは自由を持ち込むことで単なる自然法則だけでなく、人間の社会の問題、人間の実践の問題を論じようとしています。カントによれば生起するものには二通りの原因があり、それらは自然による原因性か自由による原因性とされます。この自由とは宇宙論的意味にあつては、或る状態をみずから始める能力という超越論的理念で

あつて、経験から得られたようなものを何一つ含んでいないし、またこの理念の対象はいかなる経験においても規定されないし、また与えられないとされています。次に自由という実践的概念、つまり意志の自由は、意志が感性の衝動による強制にかかわりないものとみなされ、この概念はさきの理念にもとづくものとされています。

カントは自然と自由、つまり必然性と自由についての従来の難問を解くことから始めていますが、それについてはふれないでおきましょう。それよりも重要なポイントは、カントが自由を論じるにあたり、「可想的」という考え方を新たに導入していることです。

「感官の対象に具わつていて、しかもそれ自身は現象でないところのものを、私は可想的と名づける。」(中、211頁)

この可想的なものを導入することで、人間の感官によって捉えられて現象となるその物自体の原因性が二つに分けられることになります。つまり可想的原因性と感性的原因性です。カントはここで単なる表象としての現象の根底にある超越論的对象(物自体)に、現象として現われるという性質の他に、その結果が現象のうちに見出されるにせよ、それ自身は現象でないような原因性を認めたいわけですね。ところでカントにあつては人間も物自体でした。そうすると感覚界の主体としてある物自体としての人間には第一に経験的性格を認め、第二に可想的性格を認めることになります。カントの言うところを引用しておきましょう。

「そこで我々には、感覚界の主体(訳本は主観)即ち感性的主体に——第一に経験的性格を認めることにしよう、そうするとこの性格によって主体の行為は現象として、恒常不変な自然法則に従って諸他の現象と全般的に関連し、また行為の条件としてのこれらの現象から導来せられ得るだろう、従つてまたこれらの現象と結合して自然秩序という唯一の系列の諸項をなすであろう、——また第二に我々は、この同じ主体に可想的性格を認めねばならないだろう、かかる性格によってこの主体は、なるほど現象としてのこれらの行為の原因ではあるが、しかしこの可想的性格自身は現象ではない。すると我々は、第一の経験的性格を現象に

おけるかかる物〔現象としての『私』の性格と名づけてもよいであろう。〕(中、212頁)

このようにカントは主体としての人間に現象としての性格と物自体としての性格を見出し、前者を経験的性格と規定して自然法則の領域に、後者を可想的性格と規定して自由の領域に区分していきます。ここで重要なのは、人間についての後者の規定ですね。

「全自然は、感官によつてのみ人間に開頭されるが、しかし人間は自分自身を感官によるばかりではなく、また純粋な統覚によつても認識する、しかも感覚的印象とは見做し得ないような行為や内的規定において自己を認識するのである。要するに人間は、一方では確かに現象的存在であるが、しかし他方では——即ち或種の能力に関しては、まったく可想の対象である、かかる対象としての人間の行為は決して感性の受容性に帰せられないからである。我々はこのような能力を悟性および理性と名づける、とりわけ理性は、経験的条件を付せられている一切の力から区別せられる、そしてこの区別はまったく独自でありかつ、極めて顕著である。理性はその対象を理念によつてのみ考察し、また悟性を理念に従つて規定するからである、そうしてから悟性は、みずからの概念を経験的に使用するのである。」(中、218～9頁)

カントは自然と自由を論じるところで、物自体としての人間の可想的性格を悟性や理性、とりわけ理性に求め、この理性の力に自由を認めました。カントの理性論については項をあらためて見てみましょう。

4) 人間の条件としての理性

カントは理性の働きを二つに区分しています。一つの働きは経験的に使用される場合でこれは理性の本来の道です。他方超越論的に使用される場合があり、この場合には自分の特殊な道を歩む(中、232頁)とされています。

この理性の二つの働きは、現象としての人間と、可想的性格をもつ物自体としての人間との区別に対応しているのです。可想的性格ということから由来している理性とは「経験に与えられたところの根拠には一歩も譲らず、また現象としての物

の秩序に従うことを肯んじない。理性は、まったく自発的に理念に従つて独自の秩序を形成し、この秩序のなかへ経験的条件を適合せしめるのである。」(中、220頁)というように捉えられています。

でも他方、経験的性格をもち、現象としてあらわれる人間については自由とはみなされないのです。この点についてカントは「現象界における人間の一切の行為は、彼の経験的性格と自然の秩序に従つて共に作用するところの諸他の自然原因によつて規定せられているわけである。」(中、221頁)と述べています。ところが人間の行為を理性に関して考察するならば、それは自ら行為を産出する原因としての実践理性としてあることになり、そこには「自然秩序とはまったく類を異にする規則と秩序を見出す」(中、222頁)ことになるというのです。

つまりカントにあっては人間そのものは現象なんです。が、「理性自身は現象ではない」(中、224頁)のですね。というのも理性の力は物自体としての人間の可想的性格に由来し、この「可想的性格なるものを知っているのではない」(222頁)が、しかしそれは直接現象とはならず、その結果が現象に表れているものなんです。つまり、時間とか空間といった人間の主観に属する形式はカントにあっては物自体に属するものではないから、人間の主観のうちにある現象としての物がもつ時間と空間という形式は、物自体とその人間の可想的性格、そもそも知ることはできないその性格に由来する理性の力にもとづくものなんです。このような理性理解にたつ限り、カントは人間の条件をこの理性に見出すことにならざるを得ません。カントは「理性は、意志の一切の行為の常住不変な条件であり、人間はこの条件のもとで現象として現われるのである。」(中、224頁)と述べています。

5) 人間の理性も超越論的仮象

カントはこのように人間の条件を理性に求め、この見地から、『実践理性批判』と『判断力批判』を書き上げていきます。カントの人間論を問題にする限り、『純粋理性批判』だけに止めるわけに

はいかないのですが、カントの物自体論の批判という限りではこの次元の人間論で十分でしょう。

カントの説を要約すれば、人間も心という見地からすれば物自体ですが、この物自体としての人間は、感官に捉えられて単なる表象としての現象として現われる外に、可想的性格をもっているのです。そしてこの可想的性格とは感官で捉えられないので現象にはなりません。しかしその結果は現象にあらわれてくるのですね。この可想的性格は何かを生起する力としてある悟性や理性のことで、この力によって時間と空間というアプリアリな表象が人間の直観に付着し、こうしてこれらは表象としての現象を可能にするのでした。

このカントの説明はたしかこうまく出来ていますが、しかし、よく考えてみるとこのカントの人間論は、自らが発見した超越論的仮象批判の見地が活かされていず、仮象に囚われているように思われます。その原因についてはいまは探求する余裕はありませんが、主体と客体との関係を、主体に原因をもつ現象とそれ自体は認識しえない物自体というようにわけ、人間の認識を全て主体の側に属するものとみたカントは、主体と客体の間にある絶対的他性を定式化したわけでした。(カントの物自体論を絶対的他者論と読む読み方はすでに柄谷行人「トランスクリティーク カントとマルクス」『群像』でなされています。)

もちろん、カント自身がこの絶対的他者の承認という認識にどれほど重要性を見ていたかについては私は判断しかねます。しかしこの思想がブルジョア科学や形而上学を根底からひっくり返す革命的な力をもっていることについてはヘーゲルには判っていたように思われます。そこで問題は、何故カントは、主体としての自己と物自体としての自己、あるいは主体としての自己と物自体としての他人との間に絶対的他者を認めることが出来なかったのでしょうか。もしカントがこの見地に立つことができおれば、自己と物自体としての自己、あるいは主体としての自己と物自体としてある他人との間に超越論的仮象が成立していることを主張することは困難なことではありません。

つまり、人間が現象として現われる条件として考えた理性も、物自体の可想的性格とか、他人の属性ではなくて、カントの個人的な思考にすぎなかったわけですね。こうしてカントの人間論は自ら打ち立てた超越論的仮象論批判の見地を捨てたところで成立しているのです。

6) 物自体論の破綻

カントは自らの偉大な発見である超越論的仮象とその批判を物自体としての人間には認めませんでした。その結果として、カントの人間把握は理性という共通項でくられたものとなり、絶対的他者性は見失われてしまいます。でもカントの超越論的仮象批判を物自体としての人間にまで拡張すればどうなるのでしょうか。この新しい見地からすれば物自体と現象にわけ、認識できるのは主観に属するたんなる表象としての現象だけで物自体は認識しえない、とするカントの主張自体がなりたたなくなります。というのも、人間の認識能力としての理性自体が人間に共通なものとしてあると見えるのは単なる仮象ですから、カントのいう現象についての認識も、たんにカント個人の主張にしかすぎなくなってしまうからです。そうすると、表象としての現象自体も人それぞれで認識が異なることになって認識できるとは言えないですね。

では、カントの超越論的仮象論の正当性を認め、さらにそれを物自体としての人間にまで拡張して人間の思考がそれぞれ絶対的他者としてある個々人の唯一性に囚われている、というところまで進むと一体どのような世界が開かれてくるのでしょうか。それはレヴィナスによる同一性の哲学への批判と対話の哲学の提起、というところにつながっていくのではないのでしょうか。そして、そこからさらに進もうとすれば、存在の様式と思考の論理の絶対的他者性の承認というところまで行き着かざるを得ないでしょう。ここまで進めば、カントの超越論的仮象論は、言語のフェテシズムの問題として解決できて、仮象論を批判すべく用意された物自体論は不必要となるでしょう。

後記

実践的領域がどんどん広がっていますが、文化知の普及にむけた思想的準備にこだわっています。なかば諦めていたヘーゲル弁証法の転倒の作業の目途がついたと思われるとき、アドルノの『否定弁証法』の解説をすませることが出来ました。アドルノの本は、たしかにぐるぐると同じところをまわっている、という印象を受けるのですが、存在に合わせて思考に反する思考を遂行するというアドルノの基本姿勢は、価値形徳論の解説を中心にすすめることで文化知への序曲たりうるのですね。とまれ、ヘーゲル弁証法の批判については、アドルノの多くの作業をありがたくいただいて、これから取り組むことにします。

次に、カントの物自体論の批判が出来てしまいましたので、哲学の旅、第5回の続として収録させていただきます。

次回PC講座のテーマは、言語のフェティシズムです。これについてのこれまでの展開とは一寸変わった方向を提起したいと考えています。